ISSN 1349-0206

The Journal of Engaged Pedagogy

『関係性の教育学』

Vol. 20

No. 1

『関係性の教育学会』
Engaged Pedagogy Association

『関係性の教育学』
第20巻1号2021年6月20日
関係性の教育学会
ISSN 1349-0206

The Journal of Engaged Pedagogy
Vol. 20, No.1, June 20th, 2021
Engaged Pedagogy Association
ISSN 1349-0206

Copyright 2021 by Engaged Pedagogy Association

All rights reserved. No part of this book may be reproduced in any form without permission in writing from Engaged Pedagogy Association.

PRINTED IN JAPAN

ISSN1349-0206

The Journal of Engaged Pedagogy『関係性の教育学』Vol. 20 No. 1

Contents

OECD のエージェンシー理論と小学校児童への質問紙調査の事前事後比較を通した学級活動でのエージェンシーの育成の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1-10
元 笑予, 下島 泰子, 林 尚示（東京学芸大学）

総合的な探究の時間と特別活動においてエージェンシーの育成をめざす教材の検討
—教材の要素抽出の試み—・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11-23
下島 泰子, 林 尚示, 元 笑予（東京学芸大学）

在留外国人の子どもの特別支援教育をめぐる課題と考察
—在日大使館による調査結果とインクルーシブ教育の必要性—・・・・・・・・・・・・25-40
大重 史朗（国際医療福祉大学大学院）

知的障害児・者が語る,セクシュアリティに関する経験とニーズ
－海外の研究動向にもとづいて－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41-52
門下 祐子（筑波大学人間総合科学学術院）

子どもの貧困対策における大学の役割
－地域連携事業「夢の体験教室」を事例とした試論－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53-63
神谷 純子, 江田 慧子（帝京科学大学教育人間科学部）

ルース・ハンドラーのリーダー性
－バービー・ドールからニアリー・ミー（乳房プロテーゼ）へ・・・・・・・・・・・・65-77
石渡 圭子（神奈川大学／駒沢大学非常勤講師）

実践コミュニティを取り入れた言語教育 —— Wenger et al.（2002）を中心に・・・・79-89
佐川 祥予（静岡大学）

中学校社会科授業において育成される資質・能力の検討
―資質・能力の相互作用による批判的思考力の育成プロセスに焦点を当て―・・・・91-104
曹 蓮（東京学芸大学次世代教育研究推進機構 特命助教）
田邊 裕子（東京学芸大学次世代教育研究推進機構 助教）
荒井 正剛（東京学芸大学 特任教授）
上園 悦史（東京学芸大学附属竹早中学校 教諭）

小学校教員の働き方とストレスに関する研究
―TALIS2018 のデータ分析から―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105-118
今井 崇恵（山梨大学大学院））

児童の仲間への声かけと役割取得能力との関連
―複雑な感情が生じる場面を用いた検討―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119-138
翁川 千里（東京学芸大学大学院），岩田 美保（千葉大学教育学部），
杉森 伸吉（東京学芸大学教育学部）

ベル・フックスの「関係性の教育学」における「当事者性」社会的排除・抑圧を克服するためのソーシャルワーク教育への示唆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139-150
宮﨑 理（明治学院大学）

マルチメディア教材を活用した新出単語導入の実践
―中国人大学生対象の「第二外国語」クラスにおける例から―・・・・・・・・・・151-164
菅田 陽平（北京第二外国語学院日本語学院）

教科教育を通して育成を目指す汎用的資質・能力の検討
―学習指導要領における国語科，美術科，技術科の比較分析を通して―・・・・・165-182
曹 蓮，田邉 裕子（東京学芸大学次世代教育研究推進機構）

【研究ノート】
小中学校における道徳科の評価のあり方
―教師用指導書の評価の分析とセミナー調査集計から・・・・・・・・・・・・・・183-201
元 笑予・下島 泰子・永田 繁雄・松尾 直博（東京学芸大学）

【報告】
SDGs と ESD・PBL
―2030 持続可能な開発アジェンダのための ESD(ESD for 2030)・・・・・・・・・・203-212
長岡 素彦（一般社団法人 地域連携プラットフォーム）

子どもの貧困対策における大学の役割
－地域連携事業「夢の体験教室」を事例とした試論－

神谷 純子，江田 慧子（帝京科学大学教育人間科学部）

Ⅰ．はじめに

‘大学空白地’であった東京都足立区は 2012 年春までに５大学を誘致し，2021 年４月には６大学目になる文教大学が区内花畑地区に新たなキャンパスを開く．2007 年に足立区長に就任し 2018 年から４期目を務める近藤やよい氏は，就任直後から大学誘致を強力に推進してきた．

足立区の大学誘致には教育的な目的がある．区民の経済的困窮とそれに伴う子どもの学力・進学率等の低迷は著しい．「大学の校舎を見たことがない」「大学生ってどんな人」といった子どもたちに「将来大学に行って目的を持って学ぼう」と自信を持って言えるきっかけとして，大学を身近に感じてほしいという意図があり，区は，開かれた大学を標榜する区内の大学との連携に大きな期待を寄せている（近藤，2010）．近藤区長はインタビューで以下のように語っている．

> 私が，大学の誘致にこだわっているのは，足立区の課題として，子どもを取り巻く教育的な「環境づくり」の問題があるからです．（中略）これは理想論かもしれませんが，やはり，教育以外にないと思っています．大学，高校及び諸機関と交流することによって，触発された小・中学生が将来自分もこういう勉強や研究をしてみたいという思いや大学への憧れ，大学生になってみたいという漠然としたイメージなど，未来に夢を描いて邁進できるような街を小・中学生に与えたいと思っています（近藤，2011）

大学誘致は実際に子どもの貧困対策として有効なのだろうか．大学連携のイベントや講座において，どのような要因が貧困の連鎖を断つ手がかりとなるのだろうか．大学連携は，足立区が子どもの貧困対策として施行している「未来へつなぐあだちプロジェクト」の事業として位置づけられ，第１期分はすでに外部評価も公表されている．後述するが，この外部評価では，多様な進学の選択肢を示したという点で大学連携事業に対し一定の評価を示しているものの，イベント等で重要な役割を果たす大学生という存在についてはほとんど触れられていない．

本稿では，大学の地域連携事業を通じて子どもが大学生とかかわりをもつこと自体が社会関係資本となり，子どもの進路にポジティブな影響を与える要因となるという

試論を示したい.

筆者らが所属する帝京科学大学も足立区内にキャンパスを有し，地域連携事業としてイベントや講座を行っている.筆者らも小学生を対象とする本学の地域連携事業「夢の体験教室」において何度か講座を担当したが，反応はおおむね良好でリピーターも少なからずいた（神谷，2017）．また，本学が 2010 年に千住地区にキャンパスを開き，翌 2011 年より「夢の体験教室」の開催が始まって 10 年が経ち，近年では本学にもこれら大学の地域連携イベントや講座に小中学生の頃に参加した者が入学してきている.

本稿では，まず，子どもの教育における社会関係資本の定義と役割について先行研究を概観する．次に，足立区の子どもの貧困対策における大学連携の位置づけ及びその評価をまとめ，これを踏まえて，本学の地域連携事業「夢の体験教室」のアンケートから，この講座における大学生という存在を社会関係資本に関係づけて提示する.

Ⅱ．社会関係資本をめぐる研究調査

１．学力との関係

本節では，志水（2009，2014 他）の社会関係資本に関する研究からの示唆をまとめる．社会関係資本は，一般的に，社会関係の要素と価値・規範の要素から成る[1)]とされているが，多義的であるがゆえに，分析の対象や方法に一貫性がなく，概念の理論的な弱さが指摘されている（Halpern，2005）．志水（2009）は社会主義資本を「人間関係が生み出す力」と定義づけ，子どもたちを取り巻く人間関係の豊かさ，その信頼関係・きずなの強さを表すものとした．志水（2009）の研究では，５つの政令指定都市の小学校 100 校を対象に実施した調査の質問紙を用いて，そこから社会関係資本の尺度として適切だと思われる変数を選定し，測定尺度を事後的に構成している．変数として選定された項目群は，以下である（表１）.

表１ 子どもの社会関係資本を構成する項目群

・家の人と学校での出来事について話をする
・家の人とふだん（月曜日から金曜日）、夕食をいっしょに食べる
・学校で友達に会うのは楽しい
・友達との約束を守っている
・今住んでいる地域の行事に参加していますか
・今住んでいる地域の歴史や自然について関心がありますか

これらの主成分分析によって作成された一元的な尺度により，子どもが所有する社会関係資本（家庭・学校・地域）と教育効果との関連，特に学力形成とのかかわりの有無が検討されている.

この研究（志水，2009）から得られる示唆のうち，子どもの貧困対策においては以下

の二点が注目に値するだろう.

（１）保護者の経済資本と子どもの社会関係資本の間にはほとんど関連がみられず，経済的な豊かさは社会関係資本の豊かさとは基本的に関連が薄い.

（２）社会関係資本には経済的資本や文化的資本とは独立した学力へのプラス効果があり，その効果は世帯の所得が低いほど大きい.

すなわち，社会関係資本は保護者の経済的豊かさに影響されにくく，「社会的不利益層にも開かれている」（高田，2008）こと，また社会関係資本の保有は，経済的に困窮する世帯の子どもほど効果が大きく表れることが示されている.

２.「子どもの健康・生活実態調査」（足立区，平成 28 年度）

足立区による「子どもの健康・生活実態調査」（平成 28 年度）は，世帯年収 300 万円未満であること他の基準にいずれか一つでも該当する世帯を「生活困難」と定義し，調査対象のうち条件に該当した 1,499 世帯（24.9%）において子どもの健康・生活に生活困難がどの程度関連があるかを調べたものである.

この調査では,「逆境を乗り越える力」（自己肯定感・自己制御能力など）の点数が上位 90%の子どもを「逆境を乗り越える力がある子ども」とし，地域活動（近所のお祭り・子ども会・児童館等の教室など）への参加状況とこの力の相関を分析しているが，これは社会関係資本との関連の分析と考えられる．その結果，調査対象の全学年を通じて，地域活動への参加がある子どもは逆境を乗り越える力を有する割合が高くなることが示されている.また,地域活動に参加している子どもにおいては,「登校しぶり」「朝食欠食」「５本以上のむし歯」などへの影響も緩和される傾向にあり，高学年では「幸福度」も高くなることが調査のまとめに付記されている.

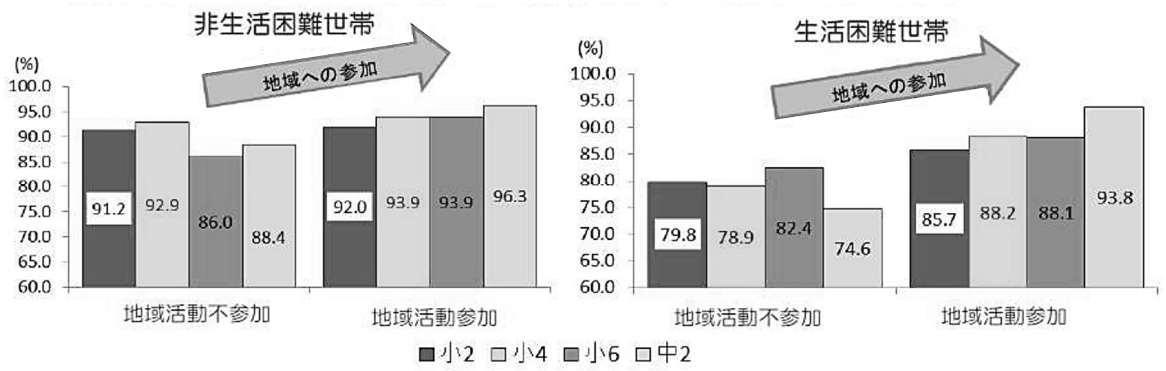

図１ 逆境を乗り越える力がある子どもの割合
出典：「未来へつなぐあだちプロジェクト（第２期足立区子どもの貧困対策実施計画）資料編」p.144

Ⅲ．未来へつなぐあだちプロジェクト

１．プロジェクト概要

足立区は，「治安」「学力」「健康」の３つを区のマイナスイメージを払拭するためのボトルネック的課題とし，特に貧困の連鎖をその共通要因として対策に乗り出した．2013（平成 25）年「子どもの貧困対策の推進に関する法律」の成立を機に，全国に先駆けて 2015（平成 27）年「未来へつなぐあだちプロジェクト 足立区子どもの貧困対策実施計画」（以下，あだちプロジェクト）を独自に策定し，本格的な取り組みを始めている．2020（令和２）年には第２期実施計画が策定された．

あだちプロジェクトは，第１期，第２期ともに「教育・学び」「健康・生活」「推進体制の構築」の３つの柱立てから成る（図２）．貧困の連鎖を断つため，子どもが自分の将来を切り拓くための「生き抜く力」を身につけることができるように，足立区ではこれらの柱立てに基づき多種多様な事業を展開している．

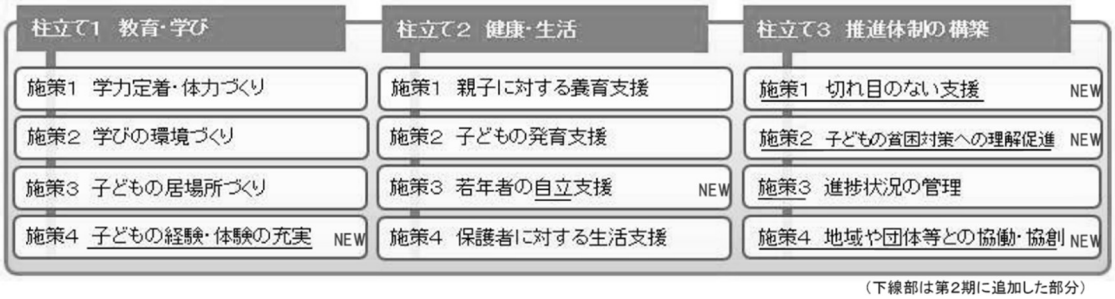

図２ 施策の３本の柱立て
出典：「未来へつなぐあだちプロジェクト（第２期足立区子どもの貧困対策実施計画）概要編」p.2

この３つの柱立てにおいて，大学連携は，第１期では柱立て１「教育・学び」の施策１「学力・体験支援」に，第２期では新たに設けられた施策４「子どもの経験・体験の充実」に位置づけられている．

２．大学連携とその評価

足立区内の５大学（平成 27 年度より６大学）は平成 21 年度より毎年学長会議を開催しており，令和元年度で第 11 回となる．これに加えて足立区と区内大学，また大学間の連携強化・情報共有の場として，実務者会議が年３回程度開催されている．これらの会議を基盤として区内の大学では「あだちの大学リレーイベント企画」の他，様々なイベントや講座等が実施されてきた．

足立区では第１期あだちプロジェクト（平成 27 年度～平成 31 年度）の主要事業について，活動指標を用いた事業評価と，中長期的な成果指標の実績値等から施設ごと

の単年度評価を行い，その実績及び評価結果を公表している．

評価はあだちプロジェクトのアクションプランに掲載された全事業について行われる．区の公開している資料によると，まず，①一次評価（自己評価）が行われ，事業担当課で課題分析，事業の進捗状況，方向性，子どもの貧困対策の視点や工夫を取り入れた事業展開について記載される．続いて，重点事業から施策ごとに抽出された事業について，②二次評価（内部評価）が行われる．目標達成度，目標値の妥当性，事業の進捗状況，課題分析，今後の方向性等についての評価を点数換算し，５段階評価を示す．二次評価の対象となる事業は，③三次評価（外部評価）を受ける．子どもの貧困対策検討会議の学識経験者により，二次評価の結果を基にして５段階評価及び意見集約が行われる．

三次評価の学識経験者には，平成 28 年度，29 年度は首都大学東京の阿部彩教授，東京医科歯科大学の藤原武男教授，一橋大学大学院の山田哲也教授の三方，平成 30 年度は阿部彩教授，藤原武男教授が務めている．

第１期あだちプロジェクトの期間に本学で実施された地域連携事業のうち，小中学生を対象としたイベントや講座は平成 28 年度６（イベント４，講座２），平成 29 年度７（イベント４，講座３），平成 30 年度７（イベント４，講座３）であった．そのうち平成28～30年度に評価の対象となっているのは,「あだちの大学リレーイベント企画」「体験！１日大学生」である．成果指標として,「体験１日大学生（中学生）アンケートで進路について考える機会となったと回答した割合」が設定されている.「子どもの貧困対策主要事業実績及び評価結果」によると，大学連携事業の評価については以下のコメントが付されている．

平成 28 年度

〔二次評価〕

・大学連携による体験・経験企画については，今後もより多くの子どもたちに参加してもらえるような工夫と効果のある体験の検証による事業内容の充実が必要である．

平成 29 年度

〔二次評価〕

・体験企画を通じて，地域との交流，自然や動物とのふれあいなど，様々な経験・体験の場が提供されている．今後もより多くの子ども達に参加してもらえるよう，事業内容や周知方法の工夫を図っていきたい．

〔三次評価〕

・大学連携による体験授業については，他大学でも大学生体験等はやっている．区内

の大学との連携に限定しなくても良いし，足立区でも自然体験はできるので，遠くに行く必要があるのかも含め，事業の見直しが必要である．

平成 30 年度

〔二次評価〕

・大学リレー企画は，将来の進路の一つとしてのきっかけづくり，経験・体験にもなっている．

・今後は意識の高い世帯だけでなく，より様々な世帯の児童・生徒に届くよう，事業内容や周知の工夫を検討していただきたい．

・体験学習推進事業については，困難家庭向けの実施事業の対象や内容等を見直し，多くの子どもが利用できるよう，再構築していただきたい．

〔三次評価〕

・大学連携事業については，大学生が身近なお兄さんお姉さんとして，子どもに直接関わるタイプの事業も良いのではないか．

・大学リレー企画のように，色々な将来の選択肢を見せていくことは重要である．

大学が実施した地域連携事業の成果としては，学識経験者の指摘にもあるように，区内の小中学生に大学進学という進路を選択肢として示したことがあげられる．しかし，子どもの貧困対策としては，平成 30 年度三次評価に述べられた「意識の高い世帯」に限定されていることへの指摘の通り，参加者層が限定されていることは否めない．本学の地域連携事業である「夢の体験教室」でも，初期には小学校を通じて参加者を募り，講座当日も小学校教員が開催場所の大学まで引率していたが，2016（平成 28）年度以降，区の教育委員会の体制が変更され各家庭から区に申し込む形となり，イベント当日も保護者等の引率が必要になった．経済的に困窮した家庭の子どもはこのような経験の機会にアクセスするところからハンディを負っているであろうことは想像に難くない．こうしたイベントへの参加機会に対し平等なアクセスを保障しなければ，参加者層は今後一層限定され，家庭間の格差が広がると考えられる．先の志水（2009）の研究が示唆しているように，社会関係資本の効果は世帯の所得が低いほど大きいとされているだけに，このような大学の地域連携事業が「意識の高い世帯」，すなわち生計にある程度ゆとりのある世帯層に限定されてしまうのは残念に思われる．

Ⅳ．「夢の体験教室」

１．実施概要

本学の学校教育学科（元児童教育学科）が区内公立小学校の児童を対象として例年

開催している「夢の体験教室」も，地域連携事業のひとつである．開講される講座は多い年には 20 近くにのぼり，300 人余りの小学生が参加する．本学にとっても一大イベントである．また，本学科は教員養成課程を擁しており，この事業を学生にとっても子どもとの接し方を学ぶ絶好の機会ととらえ，講座の内容には担当教員の専門を活かしながら，準備から当日の運営まで学生が中心になって行う．2019（令和元）年度の「夢の体験教室」は 7 月 13 日，本学千住キャンパスにて行われ，参加者は 268 人を数えた．筆者らが担当するゼミの学生とともに企画運営した講座「ちょうちょのひみつ」には，小学校４～６年の 32 人が参加した．

講座は，ちょうと食草の関係を学ぶため，ターゲットであるちょうと食草のセットをクロスワードによる謎解きで見つけ出し，予めそれらの写真が印刷されたプラスチック板を使ってキーホルダーを製作するという内容で実施した（江田ら，2020）．

２．当日の様子

講座は午前 10 時に開始し，50 分間を２回，同じ内容で行った．参加講座は申込みの時点で予め調整されており，筆者らの講座には 1 回につき 16 人，計 32 人が参加した．まず参加者をランダムに３，４人のグループに分けて席に座らせ，グループごとに２人の学生がついた（写真１）．スライドによる講座の概要説明ののち，図鑑を使いクロスワードを解く作業に入った（写真２）．コンパクトなサイズの図鑑をグループに１冊しか準備できなかったが，学生のサポートで皆で頭を寄せ合って図鑑を見たり，図鑑を手にして答えを探す担当を輪番にし，図鑑を回して順に調べたりしていた．また，図鑑やクロスワードには小学生には難しい漢字表記や専門用語も多くあり，そのままでは小学生には理解しにくいことが懸念されたが，学生の合図でクロスワードのヒントや答えを皆で読み合わせて確認するなどの工夫もあった．

写真１　講座の様子

写真２　謎解きとキーホルダー製作

参加者がターゲットであるちょうと食草を発見したら，それらの写真が予め印刷してあるプラスチック板を渡して余白を文字やイラストで飾るように伝えた．学生達は様子を見守りながら褒めたり質問をしたり，何を描いたらいいかアドバイスしたりと参加者とかかわりを持つよう努めていた．プラスチック板はトースターで加熱すると縮んで何分の一かの大きさになる．予めあけてあった穴にボールチェーンを通し，キーホルダーとして参加者に持ち帰らせた．

３．講座アンケート

講座終了後，筆者らが独自に作成したアンケートへの回答を参加者に依頼した．児童へのアンケートは以下の６項目である（表２）．講座そのものに関する質問（項目１～４）の分析は江田ら（2020）に譲り，本稿では項目５，６の結果を提示し考察する．

表２ 参加児童へのアンケート項目

Q1	授業はどうだったか
Q2	授業での大学生の説明について
Q3	授業が楽しく学べたか
Q4	全体をとおして夢の体験教室に参加して楽しく学べたか
Q5	また今日のような「体験教室」に参加したいか
Q6	「夢の体験教室」に参加して大学生になりたいと思ったか

〔項目５〕また今日のような「体験教室」に参加したいか

未回答の１件を除き全員が「参加したい」と回答した．その理由としては「楽しかったから」（14 件）が最も多く，講座の運営に携わった大学生に言及している記述は２件（表 3-2, 7）であった．

表３ Ｑ５の記述回答

1	楽しかったから。（14名）
2	大学生の教え方がとても優しい
3	次は楽しくやりたい。
4	初めて知ったことがいっぱいあったから。
5	面白いからです。でも次は中学生になるので少し寂しいです。
6	まだ挑戦したいことがたくさんあるからです。
7	大学生ともっと仲良くしたいから。
8	友達がいなくても楽しく学べたから
9	あまり体験できないことができたから。

〔項目６〕「夢の体験教室」に参加して大学生になりたいと思ったか

選択肢（５択）では，「どちらでもない」「未回答」（それぞれ１件）を除くと，「とても思う」（14 件）「そう思う」（11 件）と肯定的回答が 93%を占めた（図３）．Ｑ６に付随する自由記述には，大学の学びに対する否定的回答「大学の勉強は大変そう」（1 件），

肯定的回答「大学は面白そうだから」（2 件）があった．

大学生に言及した記述としては，大学生の接し方についての肯定的回答２件（表 4-5, 8），「大学生に対する憧れ」又はそれに類似する記述３件（表 4-3, 9, 10），「教える立場への憧れ」又はそれに類似する記述４件（表 4-2, 4, 6, 7）があった．

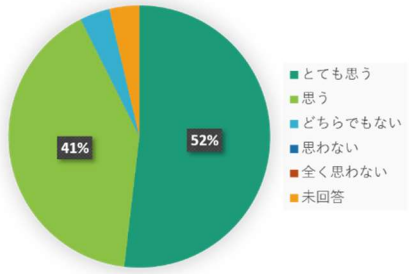

図３　Q6 の回答（5 択）

表４　Q6 の記述回答（「とても思う」「思う」と答えた児童のみ）

1	大学は面白そうだから。（２名）
2	自分も下の子に教えたい。
3	今日の大学生のことを真似してなりたい。
4	今日みたいにやってみたい。
5	優しくて分かりやすいから。
6	大学生になってみんなに伝えたいことがあるからです。
7	色んな人に色々教えたいからです。
8	勉強を教えてもらって嬉しかったから。
9	かっこよかったから。
10	自分も今日会った大学生みたいになりたい。

これらのアンケートから，講座の楽しさを作り出す要因は，活動の新奇性や同年代の仲間の存在とともに，大学生とのかかわりであることが示唆できる．またＱ６の記述回答からは，講座でのかかわりを通して，大学生という少し年上のお兄さんお姉さんが「人前に立ち注目を浴びながら皆に説明をする」「優しく教えてくれる」ことにより，憧れの対象として認識された可能性を示している．

Ｖ．まとめと示唆

あだちプロジェクトの評価（平成 28～30 年度）において，大学連携による体験活動の成果指標は「アンケートで進路について考える機会となったと回答した割合」であるが，その効果をもたらす要因に関する実証的な分析は特に見当たらない．本稿では，本学が実施した地域連携事業「夢の体験教室」でのアンケートから，大学連携事業においては，大学生がかかわることが社会関係資本として機能し，それによってもたらされる大学生という存在への憧れが，大学を含む進学に対する動機付けに少なからぬ影響を及ぼす可能性を示唆した．

あだちプロジェクトの平成 28 年度まとめには，「子どもが地域活動に積極的に参加して経験・体験を積み，ロールモデルとなる大人とかかわる（下線筆者）ことで，逆境を乗り越える力を培える可能性が明らかになりました．」という記述が見られる．また，平成 30 年度の三次評価の意見には「大学生が身近なお兄さんお姉さんとして，子どもに直接関わるタイプの事業も良いのではないか」という指摘がある．

この点について，神谷（2019）は，子ども食堂が経済的に困窮している家庭の子どもにもたらす社会関係資本として，直系（上下）の関係にある親や学校教師以外の「斜めの関係」[2)]にある多様な人々とのかかわりをあげた．学識経験者としてあだちプロジェクトの評価総括を行っている阿部も，社会関係資本に着目した貧困支援として，ビッグブラザー・ビッグシスターとの関係づくりを重視した米国のメンタープログラムを紹介している（阿部，2014）．子どもに対して絶対的な権威を有する親や学校教師とは異なる立場から子どもにかかわることができる，少し年上の存在への注目である．大学の地域連携事業において，大学での研究や講義内容，大学施設に触れることは，大学という場に興味関心を抱かせる強力な要因のひとつであろう．しかし，本稿で示唆したのは，大学生という手の届く目標となり得る存在に接することが社会関係資本として機能し，子どもに進学という進路選択を選ばせる一助となる可能性である．

志水（2009）の言うように，社会関係資本の研究には，定義と計測をめぐる理論的・方法論的な課題がある．社会関係資本には決定版といえる測定尺度がなく，質的把握の方法もさらなる研究が必要である．本稿の示唆を踏まえ，今後は子どもの貧困対策，特に大学連携事業において，大学生と接することが社会関係資本として子どもに何かをもたらす要因となるのかどうかを実証的な分析により読み解いていきたい．

注

１）Putnam(=2006)は，社会関係資本を「個人間のつながり，すなわち社会的ネットワーク，およびそこから生じる互酬性の規範」と定義している．

２）笠原嘉『青年期：精神病理学から』（中公新書，1977 年）において笠原が示した「斜めの関係」に依拠する．カタカナで「ナナメの関係」と表記する論者も多く，文部科学省もカタカナ表記を採用している．

引用・参考文献

阿部彩：子どもの貧困Ⅱ：解決策を考える，岩波新書，2014.

Halpern, David: Social Capital, Polity Press: UK, 2005.

橋本敏明：足立区における生活困難と教育（特集/貧困・格差・社会的排除と教育），教育 56(12)，34-41，2006.

神谷純子：「謎解き図書館リアル脱出ゲーム」:「夢の体験教室」における大学施設体験型講座の実践報告，地域連携研究帝京科学大学地域連携推進センター年報 1，61-65，2017.

神谷純子：「子ども食堂」訪問報告，帝京科学大学総合教育センター紀要総合学術研究 2，13-18，2019.

江田慧子，神谷純子：小学校理科「こん虫をそだてよう」の理解を深める教材開発：チョウと食草の関係に着目して，帝京科学大学教育・教職研究 6(2)，(印刷中).

近藤やよい：未来に夢を描く 足立区の街づくり，財界人 24(1)，27-29，2011.

近藤やよい：自治体維新 東京都足立区長近藤やよい氏 相次ぎ大学誘致：子どもたちに学ぶ喜び知らせたい，日経グローカル(143)，24-26，2010.

Putnam, R.D., Bowling alone: The collapse and revival of American community,2000. (=柴内康文訳：孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生，柏書房，2006.)

志水宏吉：「つながり格差」が学力格差を生む，亜紀書房，2014.

志水宏吉：社会関係資本と学力：全国学力・学習状況調査 平成 21 年度追加分析報告書（お茶の水女子大学），文部科学省，2009. (PDF)

高田一宏：同和地区における低学力問題：教育をめぐる社会的不平等の現実，教育学研究 75(2)，36-46，2008.

資料

足立区.「未来へつなぐあだちプロジェクト」. https://www.city.adachi.tokyo.jp/sesaku/miraihetunaguadachipurojekuto.html，(2020. 12.20 閲覧).

足立区子どもの貧困対策担当部：未来へつなぐあだちプロジェクト 足立区子どもの貧困対策実施計画（平成 27 年度から平成 31 年度），2016. (PDF)

足立区政策経営部子どもの貧困対策担当課：未来へつなぐあだちプロジェクト 第２期足立区子どもの貧困対策実施計画（令和２年度～令和６年度）本編，2020. (PDF)

足立区政策経営部子どもの貧困対策担当課：未来へつなぐあだちプロジェクト 第２期足立区子どもの貧困対策実施計画（令和２年度～令和６年度）資料編，2020. (PDF)

足立区.「足立の未来を拓く，力強いパートナー「大学」 大学連携事業」. https://www.city.adachi.tokyo.jp/citypro/ku/koho/daigakurenke.html，(2020.12.20 閲覧).

足立区「あだちの大学リレーイベント企画」「区内大学との連携事業一覧」. https://www.city.adachi.tokyo.jp/citypro/ku/koho/daigakurenkei_relay_01.html，(2020, 12.20 閲覧).